

第 1 章

レディネス学習の基本的な考え方

【1】レディネス学習とは

1 レディネス学習のとらえ

レディネス^{*}学習は、教師が次の授業へ向けてワンポイントの課題を子どもたちに示すことから始まります。その課題に子どもたちが授業以外の時間を使って取り組み、新たな興味・関心や疑問、知識などをもつという学習です。それらが教師によって授業の中で生かされ、より効果的な学習活動が展開します。つまり、レディネス学習は、子どもの望ましい準備態勢を授業ごとに整える学習とすることもできます。こうしたレディネス学習によって、子どもたちが授業への意欲を途切れさせず、学習を広げたり深めたりしながら次の授業に臨むという学習を積み重ねることができれば着実に学力は向上するでしょう。教師も自分のアイデアを生かしやすく、よりよい授業を創り出すことができます。

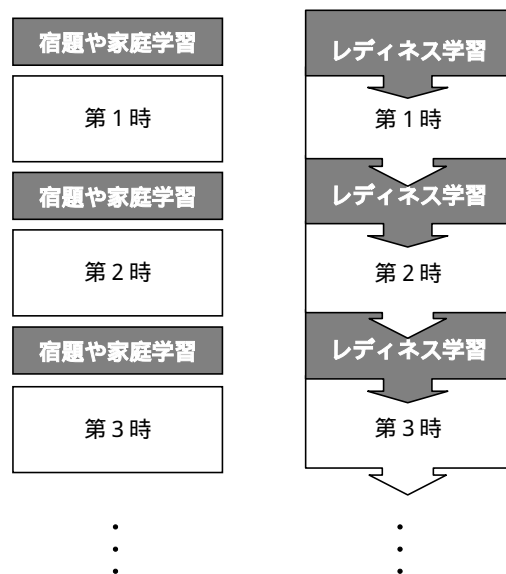
*レディネスについて『新版現代学校教育大事典』(2002.8.1 ぎょうせい)では「教育や学習による行動変容が効果的に行われるための発達の素地」と定義しています。その定義を踏まえながら、特に本冊子では「授業での学習がより効果的に行われるために求められる子どもの興味・関心、疑問、知識などから成る準備態勢」の意味でレディネスという表現を用いています。

2 レディネス学習と宿題・家庭学習

従来の宿題や家庭学習をより明確に授業と関連付けてとらえ直したものがレディネス学習です。例えば、国語の宿題で語句の意味調べを取り上げる場合に、従来は分からない語句をすべて調べるという内容が多かったと思われませんが、レディネス学習は次時の中心課題に迫る際の手がかりとなる語句を取り上げます。つまり、レディネス学習はその成果を次の授業で必ず生かすようにする点が特徴です。

従来の宿題や家庭学習も同じ機能のある程度果たしていたと言えますが、次時と直接的には結び付かないこともありました。その際に子どもたちは、学習の成果をすぐには実感しにくかったと考えられ、状況によっては負担を感じるだけで逆に学習への意欲を減退さ

宿題や家庭学習と授業、及びレディネス学習と授業との関連のイメージ図



せてしまう可能性もあります。こうした宿題や家庭学習に対して、その学習成果を次の授業で必ず生かすようにするという点で異なることを明確に表現して区別するため、「レディネス学習」という名称を用いてとらえ直しました。

なお、従来の宿題や家庭学習とレディネス学習との組み合わせ方やレディネス学習の課題設定は、子どもたちの発達段階や学習状況の違い、校種や教科の特性などに応じて教師が工夫していくこととなります。

3 レディネス学習の特性

レディネス学習は、課題に取り組む時間や方法を自分で決められることにより、授業と比較した場合制約が少ないという特性をもっています。例えば、時間にとらわれず、興味・関心に応じて取り組むことができます。また、一人で取り組む、家族と相談して進める、インターネットを活用したり図書館などの施設を利用したりするなど、学習の方法も様々考えられます。こうした学習の幅広さは、次の授業に対する準備態勢を整えるというレディネス学習のねらいを、一人一人の子どもがそれぞれの取り組み方で実現するために重要です。そのため、教師はレディネス学習を画一的、固定的にとらえずに、様々な子どものレディネス学習の展開を考慮しながら、授業のねらいに見合った内容を取り上げて簡潔・明瞭で発展性のある形でレディネス学習の課題を計画することになります。こうした発展性に加え、レディネス学習への子どもの取組状況によっては、教師が想定した以上の学習効果も期待できます。

【2】レディネス学習による授業改善とは

1 レディネス学習は授業改善の一方策

序章で述べた通り，本手引書ではレディネス学習を授業改善の方策の一つとして位置付けています。既の実施されている指導体制や学習形態の工夫など，様々な方策と組み合わせることにより，授業における学習効果を一層高めると考えます。

また，レディネス学習の内容によって，授業展開が従来と違ったものになる場合と，そうでない場合があります。前者の例として，中学校3年数学「平方根」における「2乗して2になる数を知る」の学習では，レディネス学習において子どもが「一辺が1mの正方形の対角線の長さ」を測り，授業の導入で子どもがその測定結果を発表することから始まるという展開が考えられます。その結果を受け，2の近似値を追究し，レディネス学習での体験や測定値を振り返りながら学習を進めていきます。また後者の例として，中学校1年「文字と式」の「文字式の加減」の学習では，レディネス学習で「正負の数の加減」の計算に取り組んでおくことによって，次時における授業展開に大きな変化は見られないものの，内容の理解がスムーズになるよう生かされる展開が考えられます。

いずれの場合においても，レディネス学習による授業改善を進めるには，子どもたちがレディネス学習の効果を実感できる授業改善が重要であり，しかも学習をより効果的に展開していくことが大切です。

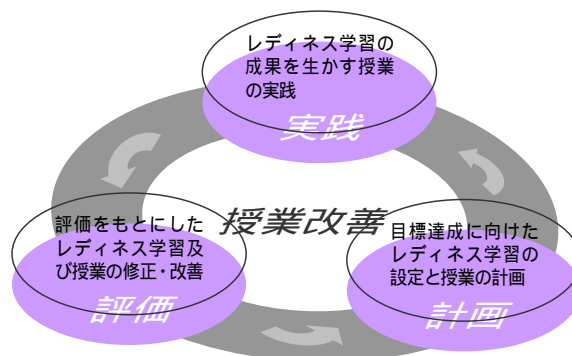
2 授業改善は一人一人の教師による日々の授業から

既に各学校では，授業改善の方策として様々な工夫を凝らし実践を重ねています。しかし，子どもの実態や設定された目標などに応じて日々の授業を直接的に計画し実施するのは私たち一人一人の教師です。授業改善を進める上で，教育課程や学習形態，施設設備の整備といった学校全体にかかわる方策に加え，一人一人の教師が1回ごとの授業について実践しやすいことも大切な要素です。教師にとって取り組みやすい方策が増えることによって，子どもたちの学力向上に結びつく授業改善の可能性も高まります。このような考え方に基づく授業改善の一つの方策が，レディネス学習の成果を生かす授業なのです。

3 レディネス学習を取り入れた授業改善のサイクル

レディネス学習の成果を生かす授業の計画から実践，評価がサイクルとして繰り返され，授業づくりが展開されます。例えば，レディネス学習を取り入れ学習形態を工夫し，いろいろな考えを引き出すような授業を行ったとします。その授業の評価を踏まえ，次の授業では思考がより深まるような課題を提示し，学習効果を高めます。さらに，その次の授業では発展的な学習にまで展開できるようなレディネス学習の課題を提示していくなど，レディネス学習を取り入れた授業を通して授業改善が推進されていくものと考えます。

授業改善サイクルのイメージ図



【3】レディネス学習の成果を生かす授業とは

1 子どもの姿でつながるレディネス学習と授業

レディネス学習は、その成果である子どもたちの新たな興味・関心や疑問、知識などを、私たち教師が次の授業で生かすことによってはじめて授業改善となります。そのため、レディネス学習の成果を生かす授業の指針として、次のようなことが挙げられます。

意図的、計画的にレディネス学習の成果を授業の中に取り入れ、学ぶことの楽しさやレディネス学習の必要性を実感できるようにし、主体的に学ぼうとする姿勢を育成します。

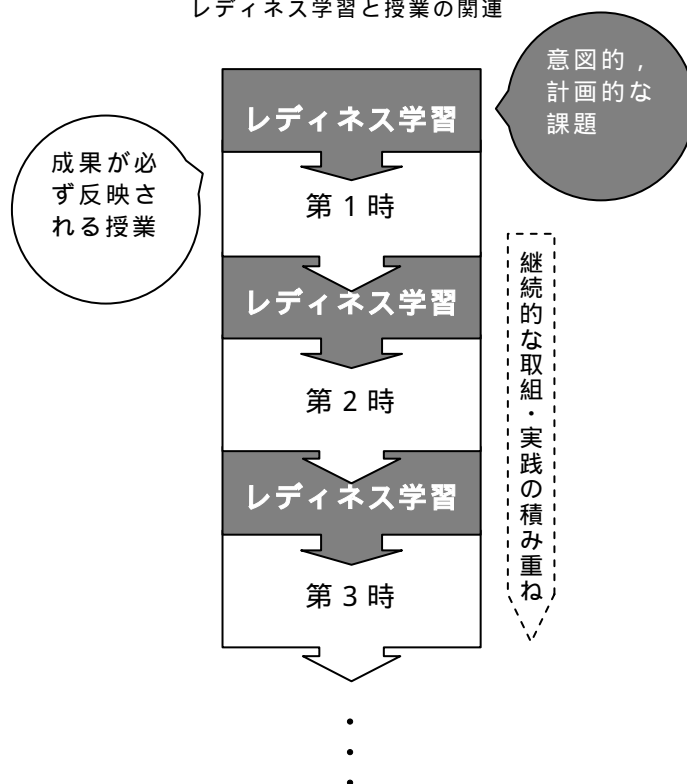
例えば、小学校理科「水よう液の性質とはたらき」では、水溶液をリトマス紙の変化によって分類する学習において、身近な液体や食品にまで広げ一般化しようという授業のねらいがあります。そこで「リトマス紙で性質を調べてみたい食品を一つケースに入れて持ってきましょう」というレディネス学習を提示すれば、子どもたちはどんなものを調べようか考え、意欲的に様々なものを準備し授業での活動もより活発になるものと思われま

す。レディネス学習とその成果を生かす授業によって、子どもが自ら問題を解く場面、考えたことを話し合う場面、考えたことを自分なりの方法で表現する場面などを充実させ、総合的に問題をとらえてよりよく解決していく態度を育てます。

例えば、の例「水よう液の性質とはたらき」の第一時のレディネス学習で『水よう液』の『よう』の漢字の書き方と意味を調べてきましょう」という課題を提示します。授業では『よう』の意味について話し合い、用意された水の中に何が溶けているのか疑問をもち、その解決に向けた実験方法を考え主体的に調べていくこととなります。

子どもたちが自分の興味や学習段階、学習環境などに合わせて、自由に時間をかけたり材料を揃えたりして思考や判断をすることができるレデ

レディネス学習と授業の関連



ィネス学習の課題を設定し、その成果を授業の中で発揮できる機会を設けます。このような学習の中で生まれた新たな疑問を踏まえながら、次時の授業に向けたレディネス学習の課題を提示します。

例えば、 であげた「水よう液の性質とはたらき」の授業では、水溶液をリトマス紙の変化によって分類する実験から「身のまわりの液体や食べ物をリトマス紙につけるとどうなるのだろうか」という疑問が子どもたちに生まれると思われます。その疑問を焦点化し、それにかかわるレディネス学習の課題を設定するといったことが挙げられます。このようなレディネス学習と授業を繰り返し行うことで身近なことを通して科学的な見方を身に付けることができると考えます。

このように、レディネス学習と密接に関連する授業を日々積み重ねます。そのことによって、子どもたちが物事を正しく理解し様々な知識や技能、学び方を確実に身に付けられるようにしながら、学習習慣の定着を図ります。

2 実践上の大切なポイント

前項で述べた指針に沿って、レディネス学習の成果を生かす授業を計画し実践していく上で、私たち教師が特に意識すべき点を整理すると、次の3つに絞られます。

**意図的、計画的な課題
成果が必ず反映される授業
継続的な取組と実践の積み重ね**

この3点が教師にとって授業を振り返り、次のレディネス学習の設定や授業の計画を練る際の大切なポイントとなります。

【4】レディネス学習の課題をどうするか

1 「授業の先取り」とは基本的に異なるレディネス学習

レディネス学習は、本来授業で行わせるべき学習を授業時間外に設定するというものではありません。次時における学習がより効果的に展開していくための準備態勢を整えるものであり、基本的に授業における学習とは区別されます。学習指導要領に示される基礎・基本の習得はあくまでも授業を通して行われるものであり、レディネス学習はその習得をより確実、よりスムーズにするためのものです。したがってレディネス学習を授業とより直結するために、次時のねらいを踏まえ課題を設定していくことが望まれます。

例えば、高等学校地理歴史科世界史Bで「ローマの地中海への進出を理解する」というねらいのもとに授業をする際、「ローマは1日にしてならず」「すべての道はローマに通じる」「永遠の都ローマ」の3つのことわざの意味を調べてくるという課題が考えられます。この課題に取り組むことで、ローマ帝国の繁栄を知り、その後のローマの発展の理解が確実になると考えます。

2 レディネス学習の課題の設定はどうか

レディネス学習は、小学校、中学校及び高等学校のあらゆる教科で扱うことができます。

レディネス学習の課題の設定は、教科の特性によってその内容も様々考えられます。また、子どもの発達段階、各校種によってもいろいろなバリエーションが出てくると考えられます。これらの違いによるレディネス学習の課題の内容については、それぞれの校種について第2章から詳しく述べることにします。

設定の際の留意点としては、教師が出題の意図を明確にもち、子どもたちのレディネス学習の取組状況や授業での変容を見取りながら、繰り返し工夫改善していくことが大切です。

3 授業ごとに提示するレディネス学習，だから「興味・関心がわき」「より軽く」「より簡潔に」

「確かな学力」の諸能力をバランスよく伸長するためには、小学校から中学校、そして高等学校へと継続した学習の積み重ねが必要となってきます。したがって、子どもの発達段階に応じたレディネス学習を授業ごとに提示し、その成果を生かす授業を着実に積み重ねていくことが望まれます。そのためには、単元全体を見通して適切にレディネス学習を設定していくこと、日々のレディネス学習への取組が習慣となるよう、子どもたちの負担過重とならないよう配慮することが大切です。具体的には

“ やってみよう ” と興味・関心がわくような内容

1日に複数教科で提示されても取り組めるような分量

迷わず取り組めるよう簡潔・明瞭な表現・指示

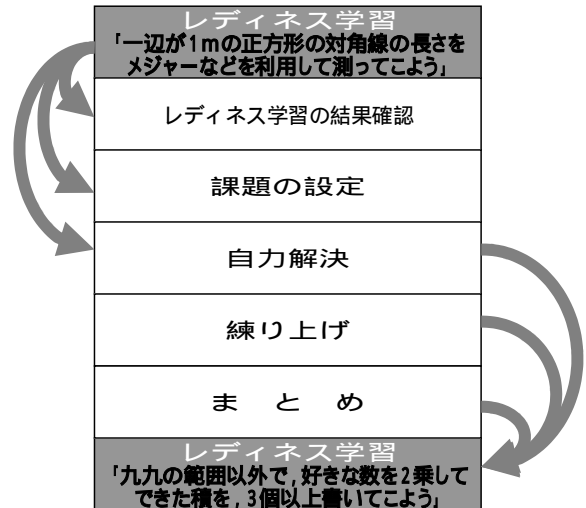
などが挙げられ、各校種において更に細かな配慮が必要になると考えられます。

【5】レディネス学習の成果を生かす授業をどう展開するか

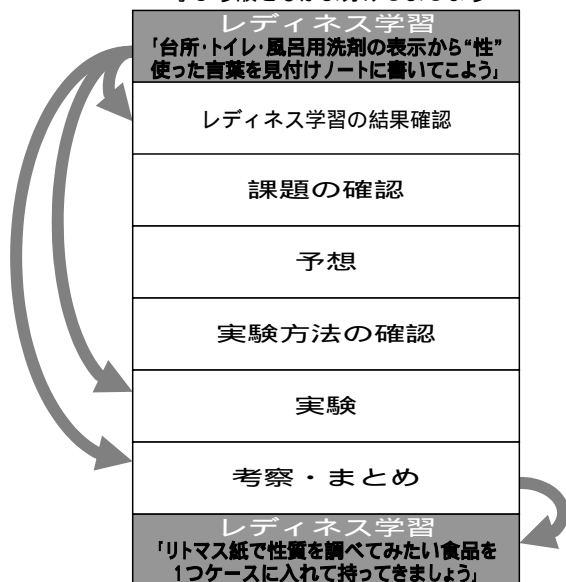
1 レディネス学習と授業の学習過程はどうつながるか

レディネス学習の成果を生かす授業は、その課題に取り組んできた子どもたちの成果を、授業における学習過程の様々な場面で生かします。例えば、レディネス学習から生まれた疑問や発見が授業の学習課題を確認する段階で授業への意欲を高めたり、自己解決や練り上げの段階で解決の視点や幅広い考え方をもたらしたりすることが考えられます。また、授業の中で生まれた新たな疑問や発想が、次時に向けたレディネス学習を広げたり深めたりすることも考えられます。こうしたレディネス学習と授業の相乗効果を意識しながら、授業を展開していくことが大切です。

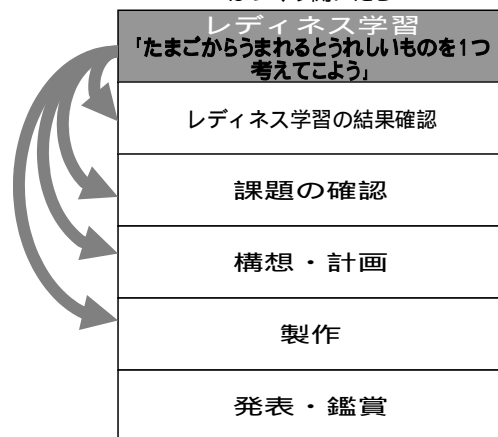
問題解決型の授業
中学校3年数学「平方根」
“2乗して2になる数”



実験・観察をともなう授業
小学校理科6年「水よう液の性質とはたらき」
“水よう液をなかま分けしましょう”



実技をともなう授業
小学校4年図工
“ぱっくり開いたら”



2 レディネス学習をどのように扱うのか

(1) レディネス学習をどの場面で提示するのか

次時に向けてのレディネス学習の課題は、主に授業の終末場面で次時の予告と関連付けて示される場合が多くなると思われます。提示方法としては、口頭もしくは板書して述べたことをメモさせたり次時の学習プリントに組み込んだり、また自己評価票やシラバスを活用し、あらかじめ単元全体のレディネス学習を示すなどの工夫もあると思います。

(2) レディネス学習はいつ行うのか

レディネス学習は、授業時間外における学習です。その学習の多くは、家庭で行われることが中心となりますが、内容によっては授業後すぐ学習できたり、昼休みや放課後一人もしくは友達や教師とともにいたりすることができます。また、発達段階によっては家族にかかわってもらいながら学習を進めることもあると思います。

(3) レディネス学習の成果を授業でどう生かすのか

レディネス学習の成果を授業にどう生かすかは、子どもの発達段階、小学校、中学校、そして高等学校といった校種など、これらの状況によって生かし方が変わることもあると思われます。それぞれの状況に応じた生かし方については、第2章以降で具体例を示しながら述べることにします。

3 授業展開上の留意点

(1) 取り組んできた子のレディネス学習を最大限授業で取り上げるようにする

取り組んできたレディネス学習を授業で扱う際、最大限授業で取り上げることが大切です。自分の取組が授業で生かされることは、子どもたちにとって非常にうれしいことですし、その喜びが以降の学習活動への強い意欲をもたせることにつながります。その方法として、取り組んできた子全員に発表させたり、紙に書いて黒板に貼り出したりすることが考えられます。さらに、取り上げられたものが授業の中心課題を解決する場面でフィードバックされ、その成果が授業に生かされたことが実感できるようにすることも大切です。

(2) レディネス学習の取組状況に応じた授業展開を想定しておく

取り組んできた子どもの学習活動が授業の中でより効果的に行われるよう、レディネス学習への様々な取組状況に柔軟に対応しながら授業を展開していくことが望まれます。例えば、取り組んできた人数に応じて学習形態を変更したり、意図した結果が集団から引き出せなかった場合は、ねらいに迫る別の課題に数分間取り組ませたりするような対応が考えられます。

(3) 主体的な活動場면을十分に確保する

レディネス学習に取り組んでくることにより、授業における学習活動がスムーズに行われ、時間的な余裕をこれまで以上に生み出すことも可能です。その時間を子どもたちの主体的な学習や発展的な学習などの場面に充て、自分の興味・関心に応じた課題を十分吟味したり自分の想いを十分表現したり、思考をめぐらせ判断し問題を解決できたりするなど、「確かな学力」をより身に付けられるようにする授業を展開していくことが望まれます。

【6】取り組んでこなかった子どもへの対応をどうするか

レディネス学習の成果を生かす授業は、クラス全員の子どもたちがレディネス学習に取り組んでくることが目指しています。しかし実際には、様々な事情から全員が必ず取り組んでくるとは限りません。したがってそれに対応した学習展開の工夫や事前の配慮が必要になってきます。この項では、その基本的な考え方について述べていきたいと思ひます。

1 取り組んでこない子どもが出てきても成り立つ授業，取り組んでこない子どもも参加できる授業

レディネス学習は、それに取り組んできた子どもにはその効果が授業で実感でき、以降の学習への意欲が高まることを目指しています。また、取り組んでこない子どもが、取り組んできた子どもの考えや意見を知ることによって自分の意見をもつことができたり思考を深めたりするような効果も目指しています。

しかし、レディネス学習の成果を生かす場面でその取組状況がまちまちであると、取り組んできた子どもの学習意欲がそがれてしまうことも考えられます。ですから、取り組んできた子どもの成果が授業で確実に生かされるようにするとともに、取り組んでこない子どももその場面に参加することで“次回はぜひやってみよう”という気持ちをもたせるような工夫が必要となってきます。

2 取り組んでこなかった子ども一人一人への対応策

(1) 意欲があまり見られず取り組もうとしない子どもにはどう対応するか

レディネス学習の課題に興味・関心をもたせ、学習意欲を引き出すことが大切です。そのためにも内容を吟味し、時間ごとのレディネス学習の有効性を検証しながら修正を加えていくことが大切です。例えば授業において、ペア学習やグループ学習などの学習形態を工夫し、取り組んできた子どもとそうでない子どもを混在させレディネス学習の成果が生きるような学習活動を展開するなど、取り組んでこなかった子どもがレディネス学習の意義を感じ取れるようにすることが重要です。

(2) 取組へのきっかけをつかめない子どもにはどう対応するか

自分一人になると“何から取り組み始めたらよいか”“何をどうしたらよいか”と、なかなか判断できない子どもがいます。その際は、より噛み砕いて説明したりレディネス学習の始めの部分だけ一緒に取り組んでみたり個に応じることが大切です。

(3) 意欲があっても諸事情で取り組めない子どもにはどう対応するか

取り組めない事情には様々な状況が考えられ、ケースバイケースの対応が求められます。休憩時や放課後などの時間を利用してレディネス学習に取り組めるような場を設定し、子どもの学ぶ意欲を大事にしてあげることが重要です。

【7】学習評価をどのように行うか

1 基本的な考え方

レディネス学習に取り組むことで、子どもたちは、興味・関心や疑問、知識などの準備態勢を整えて授業に臨みます。そして、授業においてレディネス学習の成果を出し合うことで、より一層意欲を高め、考えを広げたり、理解を深めたりすることができるため、子どもたちの学習状況は確実に向上します。その高まりを各学校が設定している観点別の評価規準に従って適切に評価することが大切です。

2 レディネス学習に取り組んできた子どもが“ やってきてよかった ” “ またやってみよう ” と思うことができるような評価 …… 「個人内評価」の一層の充実

授業ごとレディネス学習に取り組む、学習効果を高めていくためには、子どもたちがレディネス学習を習慣にしていくことが望まれます。そのためにはレディネス学習の成果が確実に授業で生き、そのよさが実感できるような評価の工夫が求められます。

例えば、一人一人の子どもの学習状況について、よい点や可能性、進歩の状況などを評価していく個人内評価を一層充実することが挙げられます。子どものレディネス学習の取組状況から個人のよい点や可能性を適切にとらえ、それを伝えることで自信をもたせたり、学習への意欲を育てたりすることが大切です。その積み重ねが、次のレディネス学習への意欲につながり、ひいては自ら学ぶ意欲や問題解決の能力を育て、個性の伸長に役立つものと思われれます。

3 授業改善に生かす評価

「指導と評価の一体化」と言われるように、学習評価は得られた情報や資料を収集・蓄積し、総括して子どもたちに示すことにとどまるものではありません。評価規準をもとにして適切に評価を行い、その結果によってその後の指導を改善し、その成果を評価するという一連の活動が繰り返されることが必要です。

レディネス学習を取り入れた授業においても、レディネス学習の取組状況を把握し、授業における子どもの変容を適切に評価します。その評価結果をその後の指導に反映させ、子どもが学習活動を効果的に行うことができるようにすることが大切です。そのためにもレディネス学習を設定する際、その意図を明確にもち、それが十分達成されたかどうかを見極める手だてをあらかじめ想定しておくことが大切です。

【 8 】レディネス学習で高まる教師の指導力とは

1 授業改善に必要な教師の指導力

平成 15 年 12 月に文部科学省から出された「小学校、中学校、高等学校等の学習指導要領の一部改正等について」には、その内容の一つとして「個に応じた指導の一層の充実」が挙げられています。「確かな学力」をはぐくむため、一人一人の子どもに応じたきめ細かな指導を通して、より学習効果の高い授業に変えていくことが求められているのです。この授業改善を進めるには、以下のように授業を計画して実践し、評価するという教師の指導力をこれまで以上に高めることが必要となります。こうした指導力向上のため、日々の授業実践や様々な研修などを通して自己研鑽を積み重ねていくことが大切です。

授業改善に必要な教師の指導力

子どもの実態に応じながら目標達成に向けて授業を計画する力
 (単元計画や指導体制の改善, 学習形態の工夫など)
 子どもの反応や学習状況に応じながら計画に沿って授業を実践する力
 (発問や指示, 板書の工夫, 教材・教具の活用など)
 子ども一人一人の学習状況を把握して授業を評価する力
 (評価を指導に生かす工夫, 授業評価による改善など)

2 レディネス学習の推進で教師も実力アップ

レディネス学習の成果を生かす授業に取り組むことによって、子どもたちの学力を高めるばかりでなく、現在教師に求められている様々な指導力も高まっていくと考えることができます。例えば、レディネス学習の課題をよりよいものにしようと考えた場合、子どもたちの興味・関心を引き出し、次の授業で確実に生かすことのできる課題を設定することになります。そのためには、授業内容の十分な理解と子どもたちの取組に対する的確な予想が必要になってきます。それらが不十分な場合、課題を精選することができず、子どもたちのレディネス学習を生かした授業展開も難しくなります。つまり、レディネス学習を推進することによって、教師も次のような点で自らの資質能力を高めることになります。

授業を自らの工夫で改善し
 実践していこうとする **主体性**
 子どもの幅広い学習を受け入れ
 授業に反映していく **受容性**
 教材に対する専門的な理解と幅広い
 教養を授業に活用していく **創造性**
 1 時間 1 単元の授業から始めて学期や
 年間の取組にまで広げていく **継続性**

